
ゼットとアウラ (WILD ARMS Alter code:Fより)

雪花舞莉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼットとアウラ (WILD ARMS Alter code: Fより)

【Zコード】

N9268P

【作者名】

雪花舞莉

【あらすじ】

WILD ARMS Alter code・Fに出て来るゼットとアウラの物語です。

短編の連作です。

一つだけ決まっていることは、一人は死んでしまうけど、それでも幸せだったということです。

目指せラブコメ！

結婚初夜の物語

天からは多くの祝福が降り注ぎ、花びらが舞い落ちる。

おめでとう、おめでとう！

その声は遠くまで響き渡り、彼の、彼女の、運命を照らし出す。

照らし出した、わけだけど。

「アウラさん？」

ベッドに座りこむ男と女。否。

ベッドに座りこんだ女と、立ち尽くす魔族一匹。

「その、ハレンチな格好はなんなんだーーー！」

魔族一匹、否、ゼットが口に手をあてて叫んだ。明後日の方向に。

「はい。ジェーンさんにいただきました」

ベッドの女、否、アウラ、もとい、白いネグリジエ（しかもまるで下着のようだ！）を着た花嫁が穏やかに返す。

「待て待て待てーい。ジェーン？ 知っているようで知らない名前。そう。答えは、他人だ！ 他人から物をもらつてはいけないと、子供時分に習つただろう！」

ビシッと自ら口に出して放つた効果音とともに、人差し指で示すが、視線は一ヶ月先の方向である。

「いいえ。ジェーンさんはお友達ですよ？」

誰の、とはもちろん言わない。

「はつ。これは幻だな。そうだ幻に違いない。お茶の間のアイドルもとんだ不覚。不可抗力。幻にやられるようでは、修行が足りん！ ガンガンと柱に頭をぶつける音がリアルに響く。

「…似合わなかつたでしょうか…」

花嫁は結婚した夜に、この衣裳を着て寝るのよ

せつかくジョンさんにもらったのに…俯く、天使（こ）の際、ゼットには小悪魔（）

「似合うに決まつてんだろーが！」

「…」コンマ〇・一の速さで怒鳴るゼットの声は、まだ少し遠くから聞こえる。

「でも…」

「俺は今、闘つている！今まで一番の戦闘だ…！あのモンスター ゼットも上回るほどの裏技！PTA、教育委員会、倫理委員会、紳士協定が俺の味方なのだ！」

「？？？」

理解していらない風のアウラ。うなだれた首筋がやけに白く、まぶしく、ゼットに突き刺さる。

「アウラちゃん？！」

突然、気配が間近に迫った。

「はい？！」

驚くアウラ。

その肩にゼットの手がかかり。

2時間経過。

「…つまりこうして、アダムとイブは出会い、俺と君もりんこになつたわけで」

うつらうつらしていたアウラの体が傾く。
それを、うつてかわった優しさで包み込むと、目にも止まらぬ速さで毛布をかけ、体を覆つてしまつ。

「ふう」

似合わないシリアルなため息は意外に重く、額の汗をぬぐう。

（勝つたよ！ 何にかわからないけど、俺は勝つたんだーー！）
とりあえず天に向かつて叫んでみたあと、静かに横たえたアウラの寝顔を見る。

額にかかる金色の髪に触れ、
(まったく俺も変わったよな)
何故。とは考えない。
「おやすみ。俺の奥さん
口づけを、ひとつ。
そんな物語。

帰つてくる日

「帰つてくるのは必然。
では、待つてているのは？」

「テレビの前のよい子も首を長くして、ついでに正座して待つてい
た！お茶の間アイドル、ゼット様、登場！ていやー！」
ストン。

「あれは何だ？鳥か？ジエット機か？惜しいーいやいや、ゼット様、
登場！シャキン！」

トスン。
・・・

「ていうかさー。早く帰りなよ

後方数メートルで、他人の振りをしていたハンペンが呟く。
「まったくだ。ここでこんなことしてると時間はないはずなんだが」
腕を組むザックに、頷くローティ。

アーテルハイドに戻ろうとした仲間たちを、ゼットが泣きの一手で
引き止め、半ば無理やり引きずつてきたのだ。

「なんだと？十数年来の友人にその言い草はないんじやないかな？
冷たい、冷たすぎるぞ、氷河期のように冷たい」

「ていうか、あいつは本当に魔族なのか？」

「だんだん不安になってきたよ」

セント・セントールに戻ってきて、30分。

その門の前で、ゼットはずーっと足踏みしていた。

「違う！断じて、ノー！だ。これは、華麗なる登場のリハーサルだ。
予習に復讐はつきものなのだ」

「間違つてるよ。・・・ザック、そろそろ助けてあげたら？」

「そうだな。不本意だが、こんな時間の無駄もないな。ローティ」
ローティも同意している。

「「セガの」「
「ムギー」

アウラはいつものように外に出でていた。
見ることはできないけど、太陽の光、風の強さ、それやすべてを感じるため。

街に魔物がいなくなつてから、少しづつ人も増えてきた。
人々と交流しながらも、アウラはこの日課をかかさなかつた。
それは、唯一つの約束のため。

鳥の声を聞いていたとき、懐かしい気配が後ろを横切つたよつた気がした。

慌てて振り返るが、跡形もなく消えている。
また・・・。少し落ち込むが、顔をあげる。
そこに一瞬の風が吹く。

「・・・」の気配・・・ゼットさんですか？」
「お、おう。そうだ。呼ばれて飛び出でじゃじゃじゃ・・・うわっ！」

抱きつかれた衝撃で多少ふりつづかが、慌てて支える。
(何?なぜに積極的?!)
明らかに尻つぼむゼット。

数か月前に別れたはずのアウラは、変わらない笑顔で。
少しの逡巡の後。

「あー。なんだその、魔族はいなくなつた」「はい」

「で、俺も無い頭で、いろいろ考えたんだけど
頭をかきながら、言葉をひねりだす。

俺は魔族で、君は二ングンで。
もう魔族はいなくて。

魔族は、必要なくて。

「おかえりなさい」

「え？」

「おかえりを待っていました」

当たり前のよう」。

ここに戻つてくるのが当然のよう」。

「お、おひ」

帰つてくるのは必然。

そして、待つているのは。

貴方と私はただ一つの約束で繋がっていた。

離れるときも、離れたあとも、何かを為し得たときも、失ったとき
も。

約束は彼らを一つにするでしょう。
その繋がりは永遠になるでしょう。
君が微笑んで、僕が戦うな。

「赤ちゃん…」

爆弾は落とされた。唐突に。自然に。止まることがなく。

「何? 何かの冗談でなくって?」

ハンペンの一割増しの冷笑が突き刺さる今日この頃。皆様、いかがお過ごしでしょうか。

よい子のみんなは、アイスの食べ過ぎでお腹を壊してないかな? お茶の間アイドルの俺様は、今。世界が破滅するより、ビックで、ビックバーンなクライシスに陥つてゐるから、よく見ておくんだぞ

「俺は冗談は言わない・・・」

「生き方が冗談だからな」

「じゃなくて!」

ザックに叫んでみても、誰も信じてくれない。

ここはアーテルハイドにある酒屋。俺様の危機に駆けつけてくれた友の名前は、ロディにザック、そしてハンペンだ。

「どう思う? ロディ」

大親友も首をかしげるばかりなり、だ。

つまるところ、俺様の重大な話は、よい子にもわかるように説明するど、こういふことだ。

あれであれな俺の大切な子であるところのアウラに元気がなかつた。心配になつた俺様は、一晩滝に打たれて考えたところ、誰もが気づかないような重大な事実に気づいた。

アウラは、何か欲しいものがあるに違ひない! と。

「その飛躍がおかしいと思うんだけど」

「じゃあ、他に何かあるのかよ!」

「それは…お前がうるさかいとか

「ない！」

まったく。ハンペんとザックの漫才には、さすがの俺様でもついていけないぜ。

「それで、ゼットが欲しいものを聞いたり」「アウラが赤ちゃんて、答えたつてか？」「そうだ！」

ビシツと指をして、決めのポーズ。

「「ない」だろ」

そう。あの夜。俺は椅子に座って、静かに宙を見ていのよつに見えるアウラに、それとな一く声をかけたんだ。

「アウラ」

「…ゼットせん？どうかしましたか？」

立ち上がりかけたアウラを慌てて制する。

「いや。そのままで。実は、その、話があつて…」

「は」

いざとなると、何がこんなに難しいんだつてぐらー、言葉が出てこない。

「あのやー。何か、や。欲しいものとか、ある？」

「え？」

「いや。何かプレゼント、したいなーつて。そーーどうやら俺様は、プレゼントしたい病にかかってしまったみたいなんだ」

俺の言葉に、アウラが笑つた。

「とくには思いつかないけど…」

「けど？」

「赤ちゃん…」

その瞬間の俺様は、雷に打たれ、天使のファンファーレが鳴り響き、花火として打ち上げられたような気分だつた。

「何かの聞き間違えじゃないの？」

「お茶の間のスーパーアイドルは、遠くで呼んでる声も聞こえるのだ」

そうしてアウラの願いを叶えるために生まれてきた俺は、大親友達に赤ちゃんの作り方を聞きにきたわけだ。

「どうか、待てよ」

ザックが飲んでいた酒のコップをドン。と、テーブルに置いた。

「いいか。お前は魔族だ」

ロディと一人で頷く。

「ロディ。耳をふさいでろ」

ロディが不思議そうにしながら、耳をふさぐのを確認して続ける。

「聞きたくはない、聞きたくはないが、そういう行為をしたとして、だ」

「何の話？」

本気でよくわからない俺をハンペンが頭突きしてくる。

「サイテーだね！」

「え。だから、何？」

「お前、子種はあるのか？」

「「ゴダネ？」

なぜかひっくり返つてこるロディを置いて、ザックが説明してくれることによると。どうやら、「実験」のことを言つてこらし。

「ジッケン？ そっちのほうが意味不明だよ」

「ていうか魔族のくせに、手慣れてることのほうが俺には謎だよ」

「だつて俺、「実験」、よくしてたし」

ニンゲンの体に入り込むために、ニンゲンのことを知る必要があった。その一貫で、「実験」というのがあって、俺はよくその任務についてた。それがニンゲンの求愛活動の一つだということは知つてたけど。

まさか赤ちゃんができるなんて！

「赤ちゃんてさ。あの、子供のことだろ？」

「まあ、そうだ

「俺達は、マザーから生まれてきたり、二ンゲンがアウラから生まれてくるって知らなかつた」

「アウラっていうよりさー」

ハンペンが俺様の頭をたたく。

「女性から産まれるんだろう?」

貴方がいればそれだけで 後編

俺様はまた一つ賢くなつた。ニンゲンは「実験」によつて、赤ちゃんができるんだ。それには「ロダネ」が必要なこと。俺には...「ロダネは...ないんだってこと。

「じゃあ、どうすればいいんだ?「ロダネをもうついてくればいいのか?」

「やしたり、お前の子供じゃないだろ」

「とこりよつ、アウラが嫌だらうしね」

「もしかして、もしかすると、アウラは俺に「ロダネがある」とことを知らんないんじゃ?」

「まあ、やうこひ可能性もあるよな」

「ロトトイ——!」

ひっくり返つているロトトイの体を起して、搖ゆがる。

どうして、俺には「ロダネがないんだー。

とにかくアウラと話し合ふ、とこひ葉に、つとと頷いて、いつもなら星より速く帰るんだけど、ヒョロヒョロ帰り道。俺はずーっとと考えてた。

アウラは赤ちゃんがほしこ。俺には計られなこ。どうしたらどうすればアウラの願いを叶えることができるんだら。どうして俺は

ニンゲンじゃないんだら。

「お帰りなさい」

寝ないで帰つた俺を、こつものよつて笑顔で迎えてくれるアウラ。

「...つさ」「さつ

俺は静かにアウラに近づいて、やの由へてさつやな手をとつた。

「あのおさ」

「はい」

「俺、アウラにしてあげられることはなんだうつて、すごい考えて。それで」

ちっちゃな手の上にそーっと置く。

「これ。全然、ダメだけど、アウラの欲しいものあげられないけど、それでも、もし、許してくれるなら。」

「これは…？」

アウラにあげたのは、人形というものだつた。しかも俺の手作り。女の子達に教えてもらつて、はじめて針と糸つていうの持つて、それはそれは人形を見たことなかつたんだけど、明らかにこれじゃないだらう…つていうような出来の悪さだつた。縫い目は大きいし、ぼこぼこしてるし、中身出てるし。

でも、俺が最初から最後までやつた。

「こつちが子アウラ」

左手の指を触つて教える。ほっぺが赤くて、髪の毛が長いのが子アウラ。

「こつちが子ゼット」

右手の上。本当は決めポーズさせたかったんだけど、腕があがらなくて、ビローンと伸びちやつたのが子ゼット。

「こあうら…？こゼット…？」

「うん。俺らの子供が、もし、いたら、こんな感じかなつて」

それからは全てがスローモーションで。

俺の視界の隅で、キラッと光るものがあつて、思わずそつちを見たら、アウラが笑顔で。

「ありがとう」

思わず、抱きしめた。

「でも、どうして？」

ソファに一人並んで、幸せな時間。アウラはボロボロの人形を、大

切そうに抱きしめていた。俺はそれだけで、嬉しくて嬉しくて。質問の意味がよくわらなかつた。

「え？」

賢いアウラはそれだけで全部わかつたみたいで。「もしかして、この前私が、赤ちゃんに何をプレゼントすればいいか聞いたからですか？」

「…え？！」

赤ちゃんに何をプレゼントすればいいか？

「あ、あ、あー？」

「ど、どうしたんですか？落ち着いてください」

慌てて、俺の背中を撫でてくれる。

「ありがとうございます。俺のビューティーハーーー。

「アウラ、赤ちゃんがいるの？！」

俺には「ダネがないのに？…」ハクル？

「え」

ポカーンとするアウラ。それから、可愛く吹きだして。

「ゼットさんは、本当におもしろいですね」

うつさ。全然、おもしろくないよ。

「俺、真面目だよ？」

「「めんなさい」

アウラも真面目な顔して、姿勢を正す。

「私には赤ちゃんはいません」

「どうこうこと？…」

それからアウラが言つたことにほ。

町の夫婦に赤ちゃんが生まれると。

アウラはその人達と仲が良くて、何をプレゼントすればいいかずっと考えていた。

「赤ちゃん…に何をあげたらいいか悩んでいて。今、プレゼントって言つたら、それしか思い浮かびません」の後半部分を、どうやら俺様としたことが、うつかりさんで聞き逃してたらしい。

「子アウラと子ゼット。私がもうつていいですか？」

「もちのうんだ！」

むしろ、アウラ以外にはあげたくないつていつか、さすがの俺様でもあげられない。

「この世に生まれてくる赤ちゃんには、別のお人形さんをあげますね」

「おひ」

アウラの悩みも晴れて、俺様はプレゼントもできて、またく今日は大安というか吉日だな！と俺は思つたわけで。

アウラ。

はい。

赤ちゃん…欲しい？

…よく、よくわかりません。

うん。

欲しくないといつわけではないと思つのですけど、私は体が弱いので、きっと産むことはできないし、それに。

貴方がいればそれだけで 後編（後書き）

切なさ成分上昇中。 。 。

風邪をひいた 前編

俺様の大事なあれであれであるといひのアウラが、風邪といひのをひいた。

これはヒジヨーなクライシスである。

俺はこんな時こそ助け合つべきだと、友人のところへ飛んだ。

「つて、また俺かよ！」

イケずな友を必死で引っ張つてゐるのに、ザックは眞面目な顔して踏みとどまつた。

「俺じやなくて、医者だ」

というわけで、友と、イシャを連れて帰る。

「…ザックさん？」

「ただいま、アウラ。安心しろ。ここにはヨボヨボだけビ、確かに腕だ」

「？」

熱があるのに起き上がろうとするアウラを必死で止めて、状況を伝える。

「つーか医者だ。医者を連れてきた」

「こんにちは、ザックさん」

「お前はゆつくり休め」

なぜだかついてきたザックが邪魔なので（「お前が連れてきたんだろーが！」）、薬を出してくれた医者とともに帰す。

「ザックさん？」

呼ばれたので、慌てて枕もとに行くと、

「側に、いてくれませんか？」

ズキューんという音がした。襲撃？いや違う。俺様のハートが撃ちぬかれたんだ。

「当たり前だ」

手を握つて、寝顔を見ていると、今までになかった気持ちになる。

抱きしめたくなる。

これがニンゲンのいう恋なのだろうか。

でも、ザックが帰り際に、「いいか。風邪はな。休息が一番なんだ。休息つていうのはな。おいしいものを食べて、ゆっくり寝て休むことだ。いいか。絶対に無理をさせるなー」とかなんとか叫んでいたので、俺はぐぐぐとこらえた。

「早く良くなってくれよ」

でも、アウラの熱はなかなか下がらなかつた。

薬は医者が出してくれたし、ベッドはあるから、問題は「おいしいもの」だ。

俺は別に飯なんか食わなくとも平氣なんだけど、アウラはそういうかない。

いつもはアウラが魔法みたいに作つてるんだけど、そのアウラは風邪だし、ゆっくり休まなくちゃいけないし…。

「ザックの奴…なんで帰つたんだ！」

まったく氣の利かない友人である。

「アーデルハイドに行くには時間がかかるし…」

俺様の力があれば一時間くらいで行けるだろつが、そばにいるつて言つたから…。

俺様はアウラが寝ているのを確認して、家を出た。万が一、目が覚めたとしても、光の速度で家に帰れるように、気は配つておく。町の奴らは、俺を見ると、一目散に逃げていく。中には、攻撃しようとしてくる奴もいる。当たり前だ。俺は魔族なんだから。俺も別に気にしなかつた。たぶん、人間を傷つけるとアウラが悲しむだろうから、攻撃されても避けて終わりだ。

けど、この非常事態にそれは厄介な問題である。なんとかして、アウラに「飯を食べさせなければならない。

「やあ！ お茶の間アイドルゼット様だぞ」

試しに屋根の上から登場してみたが、「や」ぐらいで逃げられてし

まつた。挨拶は最後まで聞けよな。

そのまま屋根の上に腰かけて、町全体を眺める。何とかアウラが病氣であることを伝えたい。

でも俺は魔族だから、「一ーンゲンを傷つける」以外の方法を思いつかなかつた。

日も暮れてきて、晩飯の時間である。アウラはぐっすり寝てるが、そろそろ起きるだろう。俺はまだ屋根の上にいた。

もうじつそ、この家でも襲つて、晩飯を盗むぞ!と三万六千回くらいた。でも、アウラは喜ばない。それだけはわかつた。

どうしよう。俺様が途方にくれていると、「お兄ちゃん」下から小さな声がした。

「ん?」

声の方を見れば、小さい一ーンゲンが3人集まつて、俺を呼んでいる。

「魔族のおにーちゃん」

「なんだ?」

降りてみると、怯えたように後ずさる。怖がるなら呼ぶなよ。

俺様の怒りが伝わったのか、一番後ろにいた女が泣き出す。おいおいおい。お茶の間アイドルの俺様でもいい加減怒るぞ。面倒くさいので無視しようとする。

「何があつたの?」

さつきから俺を呼んでる男が声をかけてきた。

「ん?」

振り返ると、男は詰まりながら、

「さ、さつきからそこにいるからー。」

と、屋根の上を指差した。

「おまえんぢ?」

「ち、違うよ。モモの家」

泣いてる女を指差す。

「そつか。悪かつたな」

一応、モモに謝る。

「何かあつたんでしょう！」

モモの隣にいた女が突然叫んだ。今度は俺様が驚く。

「だつて、いつも一緒にアウラねーちゃんをほつておくなんて、おかしい！」

「///の通りだ

俺様は感動した。

「おまえら… 小さいのに、頭いいな！」

「そ、そり？」

「俺様と話してるし、いい度胸だ！」

よし。俺様も覚悟を決める。

「実は、アウラが病気なんだ」

「お姉ちゃんが？！」

小さい二ングン達は、アウラが心配なのか、俺のまわりに集まってきた。

「風邪、という病気らしい」

「熱はあるの？」

「ある」

俺様の言葉に、深刻な顔になる。

「そんな大変なのに、アウラねーちゃんをほつといつにいのかよー」

「アウラは寝てる」

「そういう問題じやないでしょー！」

///も怒り出す。

「おにちゃんは、何してたの？」

今まで泣いていたモモが俺の袖を引っ張った。

「おにちゃん？」

「お兄ちゃんのことだよ

男（名前はタケルといつらじい）が説明してくれた。

「そうか。おにちゃんは、アウラの『ご飯を探しにきたんだ』

「そうだったの？！」

「

///もタケルも驚く。

「そうだ。けど、話しかけても直逃げるし、だからあそこについて、

考えてた」

タケル達は輪になつて、ひそひそと囁きはじめた。

「どうする?」

「ウソは言つてないみたいだけど…」

「おねーちゃんがたいへん」

「そうだよな。アウラねーちゃんのためだもんな」

「何かこの人、噂と違つて、いい人そつだし…」

会議はまとまつたらしい。

「俺達がご飯を持ってくるよ」

「そつか!助かる!ちなみに俺様の名前はゼット様だ」

風邪をひいた 後編

強力な味方を得た俺様は、家の裏で待っていた。断じて、コソコソ

という訳ではない！ 堂々と家の裏で待っていたのだ。

しかし結果はアンビリバボーだった。戦利品は、ミミが持ってきたパンのみだったのである。

「じめん… かーちゃんに見つかっちゃって」

「ううう、しょうがない！」

隊長としては、隊員の失敗も、あたたかく見守りねばならない。

「明日もう一回、がんばるから

「モモもがんばる！」

明日では遅い気もしたが、隊員の心意気を買つてこそ、真のマスターである。俺様は頷いた。

「皆の者、がんばる…」

「そこで何をしている…」

せっかくの俺様の号令をさえぎる声がした。敵か？味方か？ むむ。百パー敵だ！

見れば、二ングンたちが固まつて、こちらに武器をかまえている。

「こ、子供たちを離せ…」

「もう話してるぞ」

「ち、違うよ、こーちゃん…」

タケルが俺に耳打ちする。

「こーちゃんが悪者だと思われてる…」

なぜだ？！ と考えるほど俺様は馬鹿ではないので、答えは簡単だな。俺様が魔族だから。

さて、どうしたものか。

「おとなしくしろ…」

タケル達を見ると、

「こーちゃん、違うんだ！」

「大丈夫だ！今助けるぞ！」

間違いを正そうとしてくれてるみたいだけど、まあ。無理だよな。
「こいつはやつをと逃げるが勝ちだな。と、回れ右をしようとしたその時。

パンッ！

乾いた音がした。どうやら、ニンゲンが発砲したらしい。
ところがどうしたことか、その弾道が俺様ではなく、モモに向か
っているではないか！

「あんの、馬鹿！」

そこでお茶の間のヒーローでもある俺様は、かつこよく飛び出し、
モモを抱え、弾道を避ける！はずだったのだが、見事に失敗して、
銃弾を肩にくらってしまった。

熱い、弾けるような痛みが襲う。

「痛え！」

またしてもかつちょ悪いこと、痛みを隠せなかつた。

「にーちゃん！」

「大丈夫？！」

モモは泣き出でし、タケルもパニックで、俺の肩に触りつと
してきた。

「触るな！」

俺の血はニンゲンには良くない。小さいのが触つたら、もつと良く
ないに決まつてる。

ニニニの手をはねのけ、ニンゲンに叫ぶ。ムカつくからー。

「おまえらな！相手を見て撃てよ！相手はこいつ…」

俺様がこれから30分間、俺様の俺様による説教をしようとした、
今度はその時。

アウラが起きる気配がした。

「アウラ…」

俺はモモを捨て置き、アウラの元に飛び！ヒーローは守るべきもの
を守るのだ！

後ろの方で、泣いてるタケル達を囲む一ソングンの声が聞こえてきた。

「あの娘みたいに、洗脳されおつて」

光より速く走り（こんなに走ったのは、あの時以来だ）、何とかアウラが目覚める瞬間、そばにいることができた。ふつ。危機二髪。

「…ゼットさん？」

「具合はどう？」

「ええ。だいぶ…」

アウラの視線が止まる。はつ。俺としたことが、止血するのを忘れた。み、見えてない！見えてないはずだ…！

「ゼットさん！けがしています！」

…そうなのだ。アウラはどんなかすり傷でも、例え俺様が気付かないような傷でも、すぐに見つてしまつのだ。

「うふ。ちょっと転んだ」

「血が…」

触れようとした手を握りしめ、「…めん」と謝る。

「ちょっと治してくるね」

そばにいるつて約束したのに、俺は離れて、居間の薬箱を手に取る。別に薬なんか飲まなくたって、止血しなくて、死ないし、すぐ治るんだけど、きっとアウラが心配するから。約束も守れなくて、アウラに心配かけて、アウラの…飯も持つてこられない。俺様つてなんて役立たずなんだう。

「…ゼットさん？」

「アウラ…お、起きあがっちゃダメだ。ゆっくり寝て、おいしいもの…」

「涙が…」

アウラが俺の顔に手を触れて、俺ははじめて、目から水が出てることに気がついた。

おかしいな。俺、どつか壊れたのかな。

「何があつたのですか？」
アウラが困った顔して
ごめん。アウラ、ごめん。

馬鹿だから、俺は気づかなかつた。

アウラがどうして町から離れたところに住んでいたのか。

俺は、自分が嫌われると思ってたから、そんなの無視すればいいんだって思つてた。

でも一緒にいると、アウラまで悪者になっちゃうんだ。

アウラはニンゲンなのに。すぐキレイなニンゲンなのに！

本当は謝りたかった。けど、目から水が出るとしゃべれないみたいだ。

アウラは背伸びして、俺の頭をなでてくれた。

トントン。

しばらくして、扉をたたく音が聞こえてきた。

「誰かしら」

俺が出て行こうとしたけど、アウラ、「ちゃんと手当してください！」と怒られてしまった。

こんな時にも迷惑かけちゃうなんて、俺様はヒーロー失格だな。降板だ。今すぐに降板だ。

「ゼットさん、来てください」

「どうした？」

呼ぶて行つてみると、扉の前にはタケル達がいた。

「にーちゃん。大丈夫か？！」

タケルが俺に抱きついてきた。

「俺様は大丈夫だけど…モモは？」

「モモもだいじょうぶ…」

///とモモも俺の傷を見ようとある。いや、引っ張ると痛いんだけど。

「俺達、ちゃんと言つたからなーにーちゃん悪くないって言つたからー」

「お母さんがゼットちゃんに謝つてくださいって」

「これ、頂きました」

アウラが手に持っていた籠を持ち上げる。

「ゼットさんが頼んでくれたんですね。ありがとうございます」

「じはん、もつてきたよ！」

：俺、ちょっとは役に立ったのかな？

HOME (前書き)

すみません。シリアル全開です。

ぼくが赤ちゃんのいる、おおきな戦いがあつて、そこで魔族に殺されました。

魔族はいっぴきをのこして、いなくななりました。
おとうさんは、殺されました。

いっぴきの魔族は、まだ、生きています。

朝起きて、まずやること、顔を洗うこと。

近くに流れる川で、顔を洗って、ついでに口ももうがこする。
それからすぐに、地面に落ちてる鉄を拾いに行く。

これが僕の仕事。

たくさん捨てる時もある。少しの時もある。

それを親方を持つて行くと、いへりかのお金をくれる。
それが僕の食べ物になる。

僕は、丘の上で食べる。

僕は固いパンを飲み込む。

僕と同じ年くらいの子供が遊んでもらえることがある。

子供たちは僕を見ると、指をさして、何かヒソヒソ言こと呟つ。
そうすると僕は、パンを持って走る。

逃げてるわけじゃないよ。

僕は一緒に遊べないし、同情もされたくない。
それだけなんだ。

僕にはお気に入りの場所がある。

町を出て、少し行つたところに、森がある。

森の中には湖があるんだけど、そこに行く道は、人間の手が入つていて、木のベンチが置かれている。

そこに座つて空を見上げると、葉っぱが光をうけて、キラキラしている。

そのキラキラを見ていると、天国はこんな感じのかなって思つ。おとうさんのいる天国は、こんなふうにキラキラしてるのかな。僕はさつきみたいなことがあると、必ずこの場所に来て、上を見ることにしてるんだ。

おとうさんと同じ場所に行けるような気がするからね。

一匹の魔族は、僕が寝起きする町に住んでいる。なるべく見ないようにしてゐるんだけど、たまに目に入つてくる」とがある。

そうすると僕は、持つていた鉄を投げる。

お金になる鉄だけど、僕はそれしか持つてないから。

魔族は噂のとおり、弱つてゐるのかもしない。

僕が投げた鉄でも、見事に当たる。

「いてつ。何だ、これは。サプライズ？ 神様のプレゼント？ 人気者は困るな」

魔族はわけのわからない言葉をしゃべる。

そのまま、どこかへ行つてしまつ。

今日もやつつけられなかつた。

僕は一人になる。

「お前、兄ちゃんに何するんだよ！」

帰ろうとした僕の前に、立ちはだかる子供達がいた。

僕と同じ年くらいの男の子と、年長の女の子、年少の女の子。

「何だよ

負けじと僕もにらむ。

「おにちゃんに石ぶつけた！」

小さい女の子が真赤な顔で、手をグーにして叫ぶ。

「魔族に石投げて、何が悪いんだ」

石じやないけど。

「何だと？！」

男の子がつかみかかってくのを待ち構えていると、
「やめなさいよ」

年長の女の子が止めに入ってきた。

「あなた、いつもゼットさんに物を投げてるわね」

冷静な態度が、怒りを伝えてくる。

「悪いかよ」

「悪いに決まってるだろ！」

「あなた、ゼットさんが気づいてないとでも思つてるかもしねりない
けど、本当は気づいてるんだからね」

「そうだ。お前なんかすぐにやつつけられるんだ！」

「魔族は！」

思わず、怒鳴り返していた。

「そうやって、人間の命をゴミみたいに扱うんだ！」

「うえ――――ん！」

僕の剣幕に、女の子が泣き出す。

呆然とする一人を残して、僕は走った。

早く。

早く、あの場所に行かなくちゃ。

やつとの思いで森に辿り着いた僕は、いつものベンチを見つけて、

体が震えた。

そこには先客がいた。

魔族と、見たことのない、一人の女。

怒りなのか何なのか、胸の真ん中が苦しくなる。

魔族が女に話しかけ、女は笑う。
光が一人を照らす。

僕は膝をつき、草をむしった。
爪に土が入るのもかまわなかつた。

魔族が！

魔族が僕の場所を汚した！

しばらくすると、魔族と女は立ち上がり、湖の方へ歩き出した。
それでも僕は動けないでいた。

吐き気でうずくまつてゐる僕の目の前に、誰かが立つた。
のろのろと顔を上げると、それは魔族だつた。
驚きで後ずさる。

「なんだよ！」

「いやー。まあ、あれだ。言いたいことがあつて来てみたら、具合
が悪そうだったので、さすがの俺様もどうしたものかと考えたわけ
で」

「殺すなら殺せよ！」

最後の抵抗で、草を投げる。

どうせ死ぬんだ。少しでもやり返したい。

「うーーん。言いたいことはあれど、優先順位は119番。人の命
は一度だけ」

魔族は手をグーパーさせる。

僕は手当たり次第、暴れる。

「飛び立て、俺サマー！！」

意味のなさない掛け声とともに、気づくと僕は、魔族の肩にかつが
れていた。

「何すんだよ！」

「暴れても、びくともしない。
ついに僕も殺されるんだ。

せめて、おとうさんと同じ、天国に行けたらいいな。

諦めて目を閉じたら、何かが光った。

そして目を開けると、そこは天国・・・ではなくて、ベッドの上だ
った。

「栄養のあるものを食べさせなさい」
白いヒゲのおじいさんが言つ。

「栄養とは、つまり、おいしいものだな？！　つまり、風邪か！」

「風邪じゃないが、そんなところだ。では、さらば」
おじいさんは出て行つてしまい、魔族が俺の横に立つていてる。

起き上がるうとした僕のおでこに、魔族が手を乗せた。

「よかつたな。風邪は、おいしいものを食べれば治るんだ。そして
俺様は、おいしいものに関してはプロだ」
風邪じゃないんですけど。

突つ込もうとした僕の上に、魔族の真剣な声が落ちてきた。

「もうすぐアウラが来る。俺に石を投げてもいいけど、アウラには
投げてはダメだ。わかるな？　アウラはニンゲンだからな。そこを
間違えたらいけない。俺様はそれを言うために、颯爽と登場したわ
けだ」

「・・・え？」

「俺様は、何があつてもアウラを守るけど、人間を傷つけたら、ア
ウラが泣く。俺様は、アウラを泣かせたくないんだ」
落ちてきた魔族の声は、僕の深い所に沁みていく。

こうして僕はこの場所で暮らすことになった。

僕と、魔族と、アウラの生活は、たつた数年しか続かなかつた。

約束を返す。

魔族はそつ言つて、僕の頭を撫でた。

縁の中にある細い道を、魔族と一人の女が歩いている。

(ぼくのおとうさんは、殺されました。)

二人はベンチに座る。

(ぼくが赤ちゃんのころ、おおきな戦いがあつて、そこで魔族に殺されました。)

魔族は女に話かけ、女は笑う。

(魔族はいつぴきをのこして、いなくなりました。)

光が一人を照らす。

(おとうさんは、殺されました。)

ゼットの縁の髪が光る。

(魔族は、まだ)

目を閉じると、あの時の光が蘇る。
そこはきっと、天国に違いないのだ。

透明な光（前書き）

すみません。残酷な表現が混ざっています。
ゼットさんの性格が、オリジナルから百億光年離れたことを了承
ください。

その日、俺は気分が悪かった。
違う。

自分で自分をコントロールできなかつた。
月の影響か、たまに俺はこういつ状態になる。
自分の血の色が縁だと知る時。
そしてそれに罪悪感さえ感じない時。

「お前、ゼットだな」
セント・セントールで男たちに囲まれた。

「だつたら?」

ついてない。舌打ちする。ビッちが?

「大人しくついてこい」

外にある建物の裏に連れて行かれる。

「魔物が! いい気になつてんじゃねーよ!」

突き飛ばされ、殴られ、蹴られる。

あーもう。イライラするなあ。

「お前さあ。女と住んでるんだろ?」

髪の毛を掴まれ、持ち上げられる。

「変わつた女もいるもんだなあ。どうだ? 具合は。俺 がはつ」

これ以上言葉を発してほしくなくて、首と胴体を切り刻む。

赤い血しぶきが上がるはずなのに、まわりが白黒になる。声もよく
聞こえない。

生ぬるい温度が皮膚の上をつたつしていく。

感じる。冷え切つた体の奥が興奮している。

飛びかかつてくる男を地面に叩きつぶし、逃げる男たちの足を切る。
体に染みついている動作だ。機械的に動ける。
「た、助けてくれ」

失禁したらしい男の急所に足を乗せる。

「お前。ここの人間？」

「いや、お、俺たちはたまたま、ここに」

「そつか

素直によかつたと思う。でもここの人間だとしても、その時の俺にはたいした問題ではなかつた。

「一度ここに来ない？」

「こ、来ない！ 約束する！」

「・・・女にも近付かない？」

「もちろんだ」

「じゃあ。約束の代わりに、大事なものを貰わないとな」

その場を消去するのも慣れたもので、しばらくやつてないとか、そういうのは関係ないんだなあと思つた。

徐々に色も戻ってきて、川で赤い血を流す。服についたものは消去したけど、体についたものはなんとなく洗いたかった。気持ちを落ち着かせるためにも。

だけど、そもそも気持ちは落ち着いていて、これが少し前の俺様だつたんだなあと思う。今も見ない振りしてゐるだけの。

「川遊びには早いんじゃない？」

気配はしていたけど、声をかけられるとは思わなかつた。

「ヒロか・・・」

俺の目を見て、どこかへ行くかと思ったのに、ヒロは近づいてくる。

「悪いけど、相手してゐる余裕ないから

「あ。そつか

立ち去つてくれるかと思ったのに、距離を置いて座つてしまつた。

どこかへ行けといつても違う気がして、俺はそのまま水遊びを続ける。

「顔。まだついてる」

指摘されて、顔にも血がついてゐたのだと知つた。

「うん・・・

手で水をすくって、顔を洗う。

「俺、人間を殺した」

「だろうね」

「悪いと思ってない」

「魔族だしね」

そもそも同族を殺しても何も思わない。ましてや敵だと教えられていた人間を殺すことは、下手すると快感になつてしまつ。

アウラ。

そう。俺にとって、あまりにも特別なアウラが人間だつたから。アウラの悲しむ顔を見たくないから。喜んでもらいたいから。少しでも笑つてほしいから。

アウラが大切にするセント・セントールを、そこに住む人間を、守ると決めたのだ。

なのに、こんな天候なんだか気温なんだか、月のものだか知らないけど、簡単に左右されて、禁を犯してしまつ。あまりにも簡単で、弱くて、汚れてる。

「別にいいんじゃないの」

ヒロの声に感情は混じつてない。

「お前の親も、魔族に殺されたんだろ?」

「それはまあ、今考へても許せないけど、ゼットが殺したわけじゃないし」

「俺かもよ?」

アウラに会つ前は、命令があれば、もちろんなくとも、会えば人間を殺してた。

その中にヒロの親がいてもおかしくない。

「僕に何言わせたいのか知らないけど、僕はゼットじゃないと思つ

よ

帰るんだろう？ タケルの所に行くから。『』飯いらないって伝えて。それだけ言って、さっさと行ってしまつ。

俺は川の中で、ぼーっとしていた。

アウラに会う理由なんて、ないと思つてたのに。

家に着いて、ドアを開けると、待つていたかのようニアウラが立つていた。

「お帰りなさい」

「うん」

水は蒸発させたので、乾いてる。

だから、わかるはずがない。俺が何をしてきたのか、知られるはずもない。

なのに、アウラの姿を見て、理由はわからないけど震えた。全身の細胞みたいなものが、震えた。

「アウラ」

「はい」

「抱きしめていい？」

返事も聞かず、その小さい体を引き寄せた。

触っちゃだめとか、アウラも汚れけりつとか、そういう考え方の前に、とにかく触れていたかった。

あつたかくて、いい匂いがする。

髪の毛に口づけたまま、俺はずつと震えてた。

アウラがゆつくりと、俺の背中に手をまわすのがわかつた。

「大丈夫」

ポンポンと、背中を叩かれる。

「大丈夫ですよ、ゼットさん」

二ングンを殺したことは、俺が土に返つても言わないだろ？
これからも殺すかもしない。そのことに罪悪感もない。
例えローディ達に知られたとしても、アウラには絶対知られないよう
にする。

約束する。

俺は魔族で、アウラは天使だ。
アウラが共有することは何もない。
俺の罪は俺だけのもの。
アウラがあつたかいのなら大丈夫。
大事なのはそれだけだ。

謝らない。その代わり、許しも乞わない。
ただ、側にいさせて。

「夕飯いらなーいつつたるーが！」

「そりだっけ？」

晩飯の時間だ。晩御飯は皆で食べるものなのだと俺様が忙しい時間
を縫つて、わざわざ迎えに行つたというのに、ヒロはむくれている。
むむ。これは噂に聞く、反抗期といつやつか？ おやじと風呂に入
らないというあれか？？

「風呂には一緒に入るうー！」

がしつと肩をつかむ。反抗期はあたたかい日で見てあげなくてはい
けないのだ。

「・・・何言つてんだ！」

さすがは反抗期。すぐさま払いのけられる。

「え。ヒロつて、兄ちゃんとお風呂入つてるの？」

「なわけねーだろ！」

「いやいや。恥ずかしがらなくとも

「じゃあ、いつだよ？ いつお前と風呂に入った？」

「・・・」

確かに。まだ風呂に入つたことはなかつたな。そうか。それが問題
か。

「じゃあ、今すぐ入るうー！」

「話を聞けーーー！」

反抗期はそのままタケルの家に泊まると言い始めた。
仕方ない。あたたかい日で以下略だ。
俺様はアウラの元へ帰るとするか。

タケルの家

タケル「おい。兄ちゃん、本当に具合が悪かったのか？」

ヒロ「・・・さつきまではそうだつたんだけど、アウラに会つたら

元のバカに戻つたみたいだ・・・

タケル「良かつたじやねえか」

ヒロ「良かったというか、どっちに転がつても悪いというか・・・」
タケル「ま。お前が兄ちゃんと風呂に入つてることは、モモ達には秘密にしてやるから」

ヒロ「だから違うつて！！」

アウラの家

アウラ「え。ヒロが反抗期ですか？」

ゼット「そうなのだ。あいつも大人になつたな」

アウラ「えと・・・具体的にどういう・・・」

ゼット「晩飯はいらねえ。風呂には入らねえと言つから、俺様はあたたかい目で見てやつたのだ」

アウラ「（ヒロにかぎつてそんなこと・・・）タケルのお家の方に迷惑かけてないといいけど・・・」

ゼット「そうだな！ 俺様が明日朝一番に様子を見に行つて、窓ガラスが割れていなかチエックしまくるぞ！」

アウラ「（ゼットさん、楽しそう・・・お父さんになつた気分なのかしら？）

透明な光～後日談（後書き）

ゼットさんが一重人格男になりましたことを、改めてお詫び申し上げます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9268p/>

ゼットとアウラ（WILD ARMS Alter code:Fより）

2011年2月11日21時29分発行